

聖書：コリント人への手紙第一 11：2～10

説教題：自分の頭を辱める？

日時：2022年9月25日（朝拝）

今日からこの手紙は新しい区分に入ります。ここから 14 章の終わりにかけてクリスチャンの公的な集まりにおける問題、特に礼拝に関連して生じていた問題についてパウロは語ります。11 章前半はかぶり物について、11 章後半は聖餐式について、12～14 章は賜物について、特に異言の問題についてです。

まずパウロは 2 節で「さて、私はあなたがたをほめたいと思います。あなたがたは、すべての点で私を覚え、私あなたがたに伝えたとおりに、伝えられた教えを堅く守っているからです。」と述べます。確かにこれから色々な課題についてパウロは語ります。しかしただ彼らを叱責するのではない。コリント人たちには良い点もありました。パウロが伝えた教えすなわち使徒的教えを堅く守っている姿がありました。そのことをパウロはまず評価します。批判から始めるのではなく良い点を見出し、そのことについて彼らを称賛することから話を始めます。

その上で 3 節で「しかし、あなたがたに次のことを知ってほしいのです」と述べて、一つ目の課題であるかぶり物について語り始めます。さてこれはどういう問題だったのでしょ。またかぶり物とは一体何のことなのでしょう。おそらくこれは頭を覆うショールあるいはヴェールのようなものだったと思われます。ユダヤでは公的な場所では男女とも、それをかぶるのが一般的だったようです。しかし当時、異邦人世界に打ち建てられた教会ではどうだったのか、また一般の異邦人は公的な場所でどういう格好をしていたのか良く分かりません。しかしこのパウロの言葉を読むと、少なくともコリント教会では祈りや預言をする際、男性はかぶり物を着けなかったのに対し、女性は着けるのが通例だったようです。「祈りや預言をするとき」とは、つまり礼拝の時ということです。礼拝でそのような奉仕をする時という意味かもしれません。またこの二つの言葉で礼拝行為全体を指しているかもしれません。そんな礼拝また奉仕において、コリントのある女たちはかぶり物を着けないで祈りや預言をしていた。なぜでしょう。それはキリスト者の自由を誤って考えていたところから発生したようです。前回読んだ 10 章 23 節に、コリント教会で主張されたスローガンが括弧に括られて 2 回出て来ました。それは「すべてのことが許されている」という主張でした。キリス

ト者は今やキリストにあってすべてのことから自由であり、何にも縛られずに行うことができる。だからたとえそれまで女性がかぶり物を着けて礼拝するのが一般的習慣であったとしても、それに囚われる必要はない。ガラテヤ人への手紙 3 章 28 節：「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」先に触れた通り、コリントでは男がかぶり物を着けずに礼拝していたと考えられます。そこである女たちは、今や男も女もないのだから私たちもかぶり物を付けて礼拝しなければならないことはない。今や私にはすべてのことが許されている。そう主張して行動することにより、コリント教会には混乱が生じていたのです。パウロは 10 章 23 節で『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが益になるわけではありません。『すべてのことが許されている』と言いますが、すべてのことが人を育てるとはかぎりません。」と述べましたが、まさしくその通り、彼女たちの行為は周りに益をもたらさず、人を育てない、また教会の建て上げにつながっていなかった。むしろ破壊する行動となっていたのです。

そんなコリント教会に「次のことを知ってほしい」と言ってパウロが述べていることは神の御心による順序あるいは秩序があるということです。3 節：「すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」ここに四者が出て来ます。これらを並べるとトップに来るのは神です。そして次にキリスト、そして男、そして女となります。男と女の関係について言えば「女のかしらは男である」と言われています。これは後で見ますが創造の秩序によることです。では男が一番上のかしらかと言うとそうではありません。「男のかしらはキリストである」と言われます。そしてキリストが最高位に位置するかと思うと、そのかしらは神であると言われます。前に見た 3 章 22～23 節が思い起こされます。そこでは「すべてはあなたがたのもの」と言われましたが、話はそこで終わらず、「あなたがたはキリストのもの」、そして「キリストは神のもの」と言われました。このような秩序が神の世界にはあるということです。ある人はこれを読んで、男女平等でないと言うかもしれませんが、そういう考えはここにはありません。もしそうなら神とキリストの関係もそうなってしまいます。しかし聖書が示す通り、また歴史の教会が告白して来た通り、神とキリストの間に本質的な上限関係はありません。両者は同等です。しかし神は混乱の神ではなく、そこには秩序があります。男女の関係もそうです。この神の御心による順序、秩序をまず受け止めてほしいとパウロは言います。

そうして4節で男は誰でも祈りや預言をする時、頭をおおうべきではないと言われます。もしおおうなら自分の頭を辱めることになる。さてこれはどういう意味でしょうか。日本語訳では見えにくいのですが、3節で「かしら」と訳された言葉と4節で「頭」と訳されている言葉は原文のギリシア語では同じです。この3節と4節の関係を心に留めないと4節の真の意味は見えて来ません。4節に頭は2回出て来ますが、最初の「頭をおおっていたら」の頭は何を指すのでしょうか。それはかぶり物を着ける話をしていきますから、文字通り、礼拝する男の人の頭のことです。では二つ目の「自分の頭を辱める」の「頭」は何を指すでしょう。ここは文字通りの意味を含めても良いかもしれませんが、3節を考慮に入れて理解すべきです。先に男のかしらはキリストであると言われましたから、4節で辱めると言われている男の頭はキリストを指すと言えます。そのように読まないで最初に3節が述べられた意味がなくなります。つまり男がかぶり物で自分の頭を覆って礼拝することは、自分のかしらであるキリストに恥をもたらすことだと言われていることになります。これはどういうことでしょうか。

7節に男が頭にかぶり物を着けるべきでない理由が述べられています。そこに「男は神のかたちであり、神の栄光の現れなので」とあります。人は神のかたちに創造されたことが創世記1章に記されています。人は神を映し出す存在として、神の栄光を現す者として造られました。そういう男がかぶり物を着けて自分の頭を隠すことは、自らが現すべき神の栄光を隠すこと、覆うことを意味します。ですからかぶるべきではない。神の栄光を現す者としてかぶり物を着けずに祈り、預言すべきであるということになります。なおこれはコリント教会の中にかぶり物を着けようとする男の人がいたということではありません。これはあくまで次の女の人の問題を浮き彫りにするための前段の話です。

では女の場合はどうなるのでしょうか。5節に「女はだれでも祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭を辱めることになります。」とありますが、これも男の場合と同じですね。最初の頭は女の人の頭そのものを指しますが、「自分の頭を辱める」という方は、女のかしらである男を辱めることを指すと言えます。つまりその女の行為は単なる自分の問題では済まない。それは男に恥をもたらします。男が、自分の振る舞いはかしらであるキリスト、さらにはそのかしらである神に恥を

もたらし得るとわきまえて自らの行動を律する必要があるのと同様、女も、自分の振る舞いは自分のかしらである者に恥をもたらし得ることを思って、その行動を良く検討しなければならないことを意味します。

パウロは5節後半と6節で、女がかぶり物を着けないのは頭を剃っているのと全く同じだと言います。彼はこうして、それは女性らしさを取っ払うことを意味すると言っているのでしょう。コリント教会のある女性たちは、「今やキリストにあつて男女平等。男も女もない。女だって何をしても良い。かぶり物を着けなくたっていい。男と同じ格好をしても良い」と考えていました。パウロはそういう人たちに、それなら髪を切ってしまえ、また剃ってしまえ、と言います。女性性を捨てて男と同じようになると言うならそうせよ！と。今日なら、そうします！と言う人がいるかもしれませんが、当時、そうすることは恥ずかしいこと、女性としては考えられないことでした。だったらかぶり物を着けよ！とパウロは言うのです。女性らしさを取っ払いたいなら頭を刈りこみ、剃ってしまえ。それを望まないならかぶり物を着けよ！と。

さてなぜ女がかぶり物を着けないことは自分のかしらである男を辱めることになるのでしょうか。7節後半に「女は男の栄光の現れです」とあります。これはその前に「男は神の栄光の現れ」と言われたことと対になっています。男が神の栄光を現すべき存在であるのと同様、女は男の栄光を現すべき存在であるという意味でしょう。その根拠として8～9節でパウロは創造の秩序に訴えます。8節に「男が女から出たのではなく、女が男から出たからです。」とあります。創世記2章に記されている通り、神はまずアダムを造り、その後でアダムからあばら骨の一つを取って女を造りました。このような創造の経緯における違いが男女にはあります。ですから7節で「男は神のかたちであり」と言われました。私たちは、女もそうではないのかと思いますが（また聖書はそうだと言っていますが）、女は直接的に神に造られたのではありませんでした。男から取られる形で創造されました。この経緯また順序は9節が語るように「女が男のために造られた」ことを示しています。女は男の助け手として、不完全な男を補い、完成させる尊い存在として造られました。

このような女がかぶり物を着けずに、その頭をさらすことは、そのかしらである男を辱めることだとパウロは言います。どういうことでしょうか。男は神の栄光を現す存在として、礼拝の際、かぶり物を着けてはならないのに対し、女は男の栄光を現す存

在として、礼拝の際、かぶり物を着けるべきであると言われていました。これは礼拝では神の栄光のみが現され、賛美されるべきであって、男の栄光は現わされるべきではないということを示しているのではないのでしょうか。ただ神だけがたたえられて、人はたたえられるべきではない。ですから人の栄光は隠すのです。なのにある女たちはそれをさらして、礼拝の時にいわば人の栄光を陳列・展示していた。それは男にとって望まないこと、願わしくないこと、恥をもたらす行為であるということです。次のように言うこともできるかと思います。ある女たちは自分は今や男と同等であり、自由な存在であると主張して、男と同じ格好で礼拝の場で祈り、預言しました。その姿は男に恥をもたらしていた。あるいはその女たちは、聖霊に導かれた新しい人間と主張して、祈りや預言の際、恍惚状態で髪を振り乱しながらそうしていたかもしれせん。それは当時の異教宗教の預言者に見られる姿だったと述べる学者もいます。それを思い起こさせる姿をさらすことによって恥をもたらしていた。もしその女に夫がいれば夫に恥をもたらしたでしょうし、結婚していなくても彼女と関係する家の者たちに恥をもたらしたでしょうし、そうでなくても共同体全体に困惑と混乱をもたらしていたと考えられます。その姿は、神のみが礼拝されるべき場で自分に人々の注意を向けさせ、神への礼拝から人々の心を引き離す行為となっていました。自由の名のもとに礼拝を混乱させ、栄光を自分に奪い取っていました。そんな状況にあるコリント人に対して、パウロは女はかぶり物を着けて礼拝すべきであると言ったのです。

パウロは 10 節で「女は御使いたちのため、頭に権威のしるしをかぶるべきです」と言います。かぶり物を着けて神の前における自分の位置を受け止めて生きることは、そのように造られた女性としての権威のしるしをかぶることであると。「御使いたちのため」という部分は、御使いたちも礼拝に臨席していることに注意を向けさせるものでしょう。御使いは神の民に仕える霊であって、民の姿を特別な関心をもって見つめていることが聖書の色々な箇所を示唆されています。この手紙の 4 章 9 節に、使徒たちの歩みは「御使いたちにも人々にも見せ物になった」と言われていましたし、テモテへの手紙第一 5 章 21 節でパウロはテモテに「私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちの前で、あなたに厳かに命じます」と言いました。またルカの福音書 15 章 10 節には「一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがある」と言われています。その御使いたちを驚かせたり、困惑させないように、天上の彼らの目も意識してということでしょう。

今日はここまでとして次回、残りの 16 節までの部分を読みたいと思います。私たちはこの箇所を読んでどうすれば良いのでしょうか。今日も女性はヴェールをかぶって礼拝すべきなのでしょうか。そういうことではないと思います。今日の話は当時コリントでは女性たちがヴェールをかぶって礼拝することが通例であったことと関係します。そういう時代状況や文化も考慮に入れるべきことが次回言われます。この箇所が私たちに語っているポイントはキリスト者の自由を誤って捉えないことです。「今や男も女もない。男女平等である。私にはすべてのことが許されている。」だから色々なことに囚われず、聖霊に導かれて、ただ自由に生きて行けば良いと言うべきなのでしょうか。しかしそう主張していたあるコリント人たちは周りに益をもたらしていませんでした。教会を建て上げていませんでした。結局していたことは自己主張でした。神礼拝において神から栄光を奪い、人々の関心を自分に引き付け、混乱をもたらしていただけでした。神はそういうことを、自由を与えて奨励しているのではありません。次回の 11～12 節で見ると通り、男女平等はキリスト教のメッセージです。しかしそのことをもって全部をひっくり返してはならない。男と女について神が創造の時から定めている変わらぬ秩序、性差があります。その神の御心にもう一度耳を傾け、与えられている自由を正しく用いる者とされたいと思います。他者を辱めるのではなく、みなさんの益となるように、人々と教会が建て上げられるために仕える者でありますように。そしてすべてのことをもって神にのみ栄光を帰す歩みを、続くパウロの言葉に聞いて導かれたいと思います。